愛知工業大学研究報告
第 48 号　平成 25 年

エリアス・カネッティの権力論の一考
――『群衆と権力』と『猶予された者たち』より――

A study of Elias Canetti's power theory in „Masse und Macht“ and „Die Befristeten“

樋口　恵†
Megumi Higuchi

Abstract

The drama „Die Befristeten“(the numbered) was written by Elias Canetti in 1952/1953. All of the characters in the drama know when they will die. They are called by numbers which represent the length of years that they live. There is a hierarchy: those who live longer get more power than those who live shorter. „Die Befristeten“ is often compared with Elias Canetti‘s cultural anthropological work „Masse und Macht“(crowds and power) which was written between 1948-1959. According to the author „Masse und Macht“ was a study about the root of fascism. Although, he wanted to limit himself not to write any literary works during the period he worked on „Masse und Macht“ , he began to write „Die Befristeten“ in 1952. In both works the major theme is ‚power‘. In „Masse und Macht“ Canetti mentioned the notion of ‚surviving‘ that together with other concepts as elements have influence on power. Beside the concepts ‚death‘ plays an important role in the power of society in „Die Befristeten“. I interpreted the power of society in „Die Befristeten“ considering the above mentioned concepts ‚surviving‘ and ‚death‘.

１．はじめに

エリアス・カネッティ(Elias Canetti)は、1905 年、ブルガリアのルスチュクに生まれたスペイン系ユダヤ人の作家である。1994 年、チューリッヒで亡くなるまで、二つの世界大戦を要する激動の時代を生きた。カネッティのライフワークである文化人類学的理論書『群衆と権力 *Masse und Macht*』(1960)では、群衆が発生し権力に寄与する過程が、様々な民族の伝承や神話を題材に考察されている。『群衆と権力』の執筆期間は 1948 年から 1959 年にあたるが、自伝によると、カネッティはすでに 1925 年に群衆研究に着手し、この作品の構想を練り始めている。構想の段階も含めると、カネッティは実に 30 年以上も『群衆と権力』のに携わっていたことになる。1965 年に行われたホルスト・ビーネクとの対話で、カネッティは『群衆と権力』について以下のように語っている。

> この時代における私の主な仕事は、ファシズムの根源についての研究でしたし、それが『群衆と権力』の意味でした。起きたことを理解するために、しかもただ単にその時代の現象としてではなく、その最も深い起源と最も広範な枝分かれにおいて理解するために、私はあらゆる文学的仕事を自らに禁じました。そして、「断想」は、そう、ただこの仕事の副産物だったのです。その中にファシズ

†　愛知工業大学基礎教育センター非常勤講師

ムという言葉がないのを残念に思う人は、あの重要な書物を開きさえすればよいのです。そこにも恐らくその言葉は出てこないでしょうが、しかしいずれにせよ、それが、この約 500 頁の書物が本来扱っているもの以外の何ものでもないのです。

Meine Hauptarbeit in dieser Zeit war doch die Untersuchung der Wurzeln des Faschismus, das war der Sinn von »Masse und Macht«. Um zu begreifen, was geschehen war, und zwar nicht bloß als Phänomen der Zeit, sondern in seinen tiefsten Ursprüngen und weitesten Verzweigungen, hatte ich mir jede literarische Arbeit verboten. »Und die Aufzeichnungen« waren ja nur ein Nebenprodukt dieser Arbeit. Wer in ihnen das Wort Faschismus vermißt, der braucht nur den größeren Band aufzuschlagen, und obwohl auch da das Wort vielleicht nicht vorkommen wird, so sind's doch immerhin ungefähr 500 Seiten, die eigentlich von nichts anderem handeln. [GZK:98/150]

カネッティはこの対話の中で、『群衆と権力』の目的が「ファシズムの根源についての研究」であると明言している。ユダヤ人として、1920 年代から 30 年代をウィーンで過ごしたカネッティにとって、ファシズムは切迫した問題だった。カネッティの言うように『群衆と権力』にはファシズムという言葉が登場しないが、権力の文化人類学的考察によって、「ただ単にその時代の現象」としてではなく、「その最も深い起源と最も広範な枝分かれにおいて」、カネッティはファシズムを理解しようとしたのである。

カネッティはこの対話の中で、『群衆と権力』の執筆期間中、この執筆に専念するためにいかなる文学的仕事もしないことを心に決めた、と述べている。それにもかかわらず、1952 年、カネッティは自らその禁を破って、戯曲『猶予された者たち *Die Befristeten*』(1964)の創作を始めている。カネッティは何故、彼のライフワークとも言える『群衆と権力』の執筆を中断して『猶予された者たち』を書いたのだろうか。

執筆期間が重なることから、しばしば『群衆と権力』と『猶予された者たち』の関連性が指摘される。イザベラ・ユストは『群衆と権力』の理論を戯曲に転用した作品が『猶予された者たち』であり、権力の問題を主題にしていると解釈している[1]。筆者もユストと同様、『猶予された者たち』では権力の問題が主題とされていると考える。しかし、『猶予された者たち』は、単に『群衆と権力』の理論を文学という形に投影したものではなく、『群衆と権力』とは別の方法・理論で、権力、あるいはファシズムを考察しようというカネッティの試みだったのではないかと考える。

本論考では、カネッティの主著『群衆と権力』との思想的連関を視座に入れつつ、『猶予された者たち』の社会における権力構造を考察する。また、『猶予された者たち』の主題と考えられる「死」が、作中でどのように扱われているのかを考察する。

第二章では、まず、カネッティの自伝的要素に着目し、『猶予された者たち』の執筆動機を探る。次に、『猶予された者たち』執筆期のカネッティの権力観を、一人の「権力者」とともに論じる。

第三章では、『猶予された者たち』の社会における権力を考察する。『群衆と権力』の中で論じられている「生き残ること」という概念が、『猶予された者たち』の社会の権力にどのような影響を与えているのか、また、この社会の社会構造を探る。第四章では、第三章で述べたような「生き残ること」の感情を克服しようとするカネッティの試みについて述べる。また、『猶予された者たち』の社会に革命がもたらされた後、この社会がどのように変化したのか検討するとともに、権力を打開するためのカネッティの思索を探る。

---

[1] Vgl. Just, Isabella: *Der Tod als Ursprung der Macht －Elias Canettis anthropologisches Werk „Masse und Macht“ und sein Drama „Die Befristeten“*, Hamburg (Diplomaarbeiten Agentur) 1997. S.5

２．作品成立の背景

２．１．作品の執筆動機

『猶予された者たち』では、権力の問題と共に、それまでのカネッティ作品では取り上げられてこなかった問題、「死」の問題が作品のテーマとして前面に現れている。

ユセフ・イシャグプールによると、カネッティが『猶予された者たち』を書いたのは、「死という問題が彼の思索の中心を占めるようになった」からである[2]。自分が死ぬまでに『群集と権力』を書きあげることができるのだろうか、というカネッティの不安と焦燥が、自らの寿命への問いとなって現れ、『猶予された者たち』に現れたのだとしている[3]。パウル・フレミングも、カネッティの作家としての焦燥を『猶予された者たち』の執筆の動機として挙げている。自分が死ぬまでに文学的成果を収めることができるのかという焦りと、寿命への問いが契機となり、『猶予された者たち』を執筆するに至ったというのだ[4]。スヴェン・ハヌシュクもまた、『猶予された者たち』はがカネッティの死に対する思いから生まれた作品であるとしているが、ハヌシュクによると、カネッティ自身の寿命への問いが動機となったのではなく、彼の身近な人たちの死が、その執筆の動機となっている。身近な人たちを失くしたことにより、カネッティは死をテーマとした作品の執筆に取り組むことを決意した、というのだ[5]。以上に述べた三者に共通する点は、カネッティが個人的な動機から作品を執筆するに至ったと考えていることである。

個人的な動機から筆が執られたのだとしても、『猶予された者たち』では個人的な死は扱われていない。「劇場は全体としての公衆に関わるものだけを上演すべき(Nur was die Öffentlichkeit als Ganzes betrifft, scheint mir auf dem Theater darstellenswert) [FO:56/68]」であると考えていたカネッティは、『猶予された者たち』において、社会全体において死が担う役割に焦点を当てている。『猶予された者たち』の世界では、死の脅威を巧妙に利用した制度によって社会の秩序が保たれている。人間は生まれると同時に死期を告げられ、寿命の長短によって上流、中流、下流という階級のなかに組み込まれる。寿命の長短が階級社会を構築することに寄与しているのである。このように、カネッティは『猶予された者たち』において、個人的なものとしてではなく、社会的連関において、死を描いている。カネッティが『猶予された者たち』において描こうとした死は、社会的な問題を孕んだ一つの現象だったのである。

２．２．権力者のモデル、ヘルマン・シェールヒェン

ウィーンにいた頃、カネッティはヘルマン・シェールヒェンという指揮者と知り合い、1933 年に開かれたシュトラスブール音楽祭に招待される。音楽祭の夜、シェールヒェンは突然、客の手相を見ると言いだした。彼は客の特性や将来性には一切触れず、皆がどれだけ生きられるか、その寿命だけを告げた。カネッティは手相を見てもらった人々の様子を次のように描写している。

> 手相を見てもらったあと、ある人たちの顔に満足の表情が、他の人たちの顔に驚愕の表情が浮かぶのを私は見た。それから、みんな自分の席にもどり、静かに腰を下ろした。手相のことについては、議論はかわされなかった。誰ひとり、もどってくる隣人に≪かれは何と言いました？≫と尋ねたりしなかった。しかし、その場の雰囲気はそれと分かるほど一変していた。もはや冗談ひとつ口にされなかった。帰して待つべき長い寿命を与えられた幸運な人たちは、おのれ自身に対するこのよき便りを手ばなさなかった。しかしまた、まず

---

[2] イユセフ・イシャグプール『エリアス・カネッティ　変身と同一』（川俣晃自訳、法政大学出版局、1996 年）8 頁

[3] Vgl.イシャグプール:132 頁

[4] Fleming, Paul: Dead Men Walking zu Canettis Drama Die Befristeten. In: Susanne Lüdemann (Hg.): *Der Überlebende und sein Doppel, Kulturwissenschaftliche Analysen zum Werk Elias Canetti*, Freiburg (Rombach Verlag) 2008, S.127-143.　S.127

[5] Vgl. Hanuschek, Sven: Elias Canetti. München/Wien (Carl Hanser Verlag) 2005. S. 419

いことになった他の人たちから、反抗ないし悲嘆の言葉は一言も聞かれなかった。

Unter den Abgefertigten sah man zufriedene, man sah auch betroffene Gesichter. Alle gingen dann an ihre Plätze zurück und setzen sich still nieder. Es wrde nicht darüber diskutiert und niemand fragte einen Nachbarn, der zurückkam: »Was hat er gesagt?« Doch war es auffallend, wie die Stimmung sich änderte. Es wurden keine Späße mehr gemacht. Die Glücklichen, die eine lange Lebenszeit erwartete, beihielten ihr Glückfür sich. Aber auch die anderen, die kurz gehalten worden waren, verfielen nicht in Auflehnung oder Klage. [AS:82/111]

カネッティが目撃したこの場面から分かるのは、死期を告げられた時、誰もがそれを信じたということである。長く生きるということを告げられた者も長くは生きられないことを告げられた者も、静かにそれを受け入れた。長く生きると告げられた者がそのお告げに喜び、黙るのは当然と言える。しかし、注目すべきは、長くは生きられないと告げられた者が、反抗することなくそれを受け入れたことであろう。長くは生きられないと言い渡されているにもかかわらず、反抗することなくそれを受け入れている様子は、『猶予された者たち』の登場人物たちと共通する。『猶予された者たち』の社会の人々は、生まれてすぐに自分がいつ死ぬのかを告げられるが、この特異な物語の着想をカネッティはシェールヒェンの「手相占い」から得たと考えられる。カネッティは、人々に死期を告げるシェールヒェンに権力者の姿を見たと語っているが[AS:81/109]、人々に死期を告げるという行為は、どのように権力と関わるのだろうか。

『群衆と権力』によれば、権力の増大に寄与する働きをもつのが「命令」である。人間は子どもの頃から様々な命令を受けて育ち、大人になってもあらゆる場面で命令を受けるが、どんなに無害に見える命令にもその根底には必ず死の脅威が潜んでいるという。カネッティによると、命令の起源とは「逃走命令」であり、捕捉されそうになった動物が逃げる際に自ら発せられるものである。すなわち、命令の本質は「死刑判決」なのである[Vgl.MM:357-362/(下)37-43]。人々に死期を告げるという一種の「死刑判決」（＝命令の本質）は、権力と結びついていることが分かる。シェールヒェンに占われた人々も、『猶予された者たち』の登場人物たちも、死期を告げられるという「死刑判決」を受けており、ここに命令の本質、権力の要素が描かれている。『猶予された者たち』というタイトルの「猶予」という言葉が死刑執行の猶予期間を表現していることからも、カネッティが「死刑判決」というモティーフを重視していたと推測されるが、それは「死刑判決」という命令の本質が権力と結びついていたからではないだろうか。「２．１．作品の執筆動機」で、カネッティにとって、「死」は社会的な問題を孕んだ一つの現象だったと述べた。「死刑判決」と権力との関係を鑑みると、カネッティの考えた「死」の孕む社会的問題とは、権力だったのではないかと推測される。次章では、『猶予された者たち』で描かれた死が権力と結びついていると仮定し、「生き残ること」という概念を念頭に置いて、『猶予された者たち』における権力を考察する。

３．生き残ること

『猶予された者たち』では、「生き残ること」という概念が重要な役割を担うが、この「生き残ること」という概念は『群集と権力』の中で権力の起源として論じられている。この節では、カネッティの「生き残ること」という概念を『群集と権力』に依拠して説明し、その概念が『猶予された者たち』においてどのように展開しているのかを考察する。

生き残る瞬間は権力の瞬間である。死を眺めた驚きは解消され、満足に変わる。というのも、自分自身は死者でないからである。

Der Augenblick des Überlebens ist der Augenblick der Macht. Der Schrecken über den Anblick des Todes löst sich in Befriedigung auf, denn man ist nicht selbst

der Tote. [MM:267/(上)333]

『群衆と権力』の有名な一節である。『群衆と権力』「生き残る者」という章は、この一文から始まる。カネッティによると、生き残る瞬間は権力の瞬間である。例えば、戦場において他人の死を眺めるとき、人は恐怖するが、その恐怖はやがて「死んだのは自分以外の誰かだ」という満足に変わる。このように他人の死の体験を積み重ねるうちに、人は自分が不死になっていくかのような思いにとらわれ、もっと生き残りたいと思うようになる。生き残りたいと強く願う者は、そのうち人を殺すことによって他人の死の経験を積み重ね、自らは生き残ろうとするようになる。そして、自分が生き残る唯一の者になろうと欲する [MM:267/333]。生き残りたいという欲望が権力者を作り出すのである。

『猶予された者たち』には、このような生き残ることと権力との関係が見て取れる。『猶予された者たち』の社会では、名前の数字の大きい者、すなわち長く生きる者が「上流」と呼ばれる階級に属す。名前の数字の小さい者、すなわち寿命の短い者は「下流」に、平均程度に生きる者たちは「中流」に属す。長く生きる者、すなわち生き残るという経験をより多く重ねる者ほど身分の階級が高くなるといった風に、生き残ることが一種の階級制を成している。生き残る者が権力を握る社会構造となっているのだ。他者の死を積み重ねること、すなわち「生き残ること」によって、死は権力と結びついている。

『猶予された者たち』には、先述のように「上流」「中流」「下流」という階級が存在するが、この階級は実際には機能していないのではないかと思われる。一般的に権力というと、上流階級の人々が財を成している、あるいは彼らが中流・下流の人々を搾取しているといったようなイメージがあるが、『猶予された者たち』の社会にはそのような関係は存在しない。他にも階級間には何ら具体的な権力関係は見られない。「生き残ること」の理論に基づいた階級制度は名目上のものにすぎず、社会の構成員の間では、実際には機能していないことが分かる。では、本名が「一二二」であり、登場人物の中で桁違いに長く生きる者である「カプセラン」には、この「生き残ること」の理論はあてはまるのだろうか。カプセランは確かに、人々のカプセルを管理する一種の権力者である。しかし、カプセランは、自分が職を退いたとしても、他の誰かが自分に代わってカプセルを管理するようになると考えている。このことから、カプセランは、権力者ではあるが、唯一無二の権力者ではなく、代替可能な存在であることが分かる。カプセランの持つ権力は、カプセラン個人にあるのではなく、むしろカプセルを管理して人々が「瞬間」通りに死ぬのを監視するという、職務それ自体にあると考えられる。

階級制度が実際には機能していないということを鑑み、「上流」「中流」「下流」の人々は実は皆平等であると仮定すると、全ての者が平等な社会に、カプセルを管理する一人の権力者が存在する、ということになる。しかし、これまで述べたように、カプセランは独裁者ではない。絶対的権力を握る人物ではないのである。人々はカプセランの権力によって、「瞬間」の制度に従っているわけではない。それにもかかわらず、『猶予された者たち』の社会の人々は、厳格な秩序のもとに置かれている。一体誰が、または何が、人々に「瞬間」の制度による秩序を強いているのだろう。この社会のどこに権力があるのだろうか。

ミシェル・フーコーは『監獄の誕生』において、フランス革命後の社会における権力を以下のように考察している。

> その権力は、所有されるよりむしろ行使されるのであり、支配階級が獲得もしくは保持する≪特権≫ではなく支配階級が占める戦略的立場の相対的な効果である[6]。

権力はもはや、君主のような支配階級が持つ特権ではないことを示唆している。『監獄の誕生』では監視の働きに着目し、社会に流布した新しい権力

[6] ミシェル・フーコー『監獄の誕生――監視と処罰』（田村俶訳、新潮社、1977 年初版、1978 年 2 刷）［原書の初版は 1975 年］、31 頁

が考察されている。「一望監視装置」を例に、近現代の社会の仕組みが説明されている。一望監視装置においては、常に誰かに見られているかもしれない、という意識を持つことによって、被拘禁者が管理される。実際に見られているか否かに拘わらず、見られているという意識が人間の行動を抑制し、監視によってもたらされた規律・訓練的な権力が社会の隅々まで導入される。見えざる目が権力を網の目のように社会に行き渡らせているのである。見えざる目という権力の働きは、現代の管理社会の本質と言える。

『監獄の誕生』においてフーコーは近現代社会における権力をパノプティコンという牢獄を例に挙げて論じているが、カネッティも『群衆と権力』において牢獄を権力に例えている。カネッティによると、権力の装置である牢獄は暴力の意志を体現しており、たとえ実際に暴力が働いてない時でも、被拘禁者は常にそれを意識する。権力は常に暴力を意識させることによって成立するのである。「監視」と「暴力」という異なる要素によってではあるが、二人がともに「牢獄」によって権力を論じていることは注目に値する。

イシャグプールは、『猶予された者たち』の社会を「なにもかも管理されつくしている[7]」世の中だと定義し、須藤温子は、『猶予された者たち』の社会を管理社会だとしている[8]。前に述べたが、自分の死期を知る人々は、「死刑執行」を猶予された囚人のようである。さながら牢獄に囚われているかのようなこの人々は、管理社会に生きる人々なのである。『猶予された者たち』の社会において権力を存続させている要素として、二章で論じた「死刑執行」という命令、三章で論じた「生き残る者」の感情とともに、管理社会が挙げられるだろう。

『猶予された者たち』においては、権力はカプセランという個人の領域を超越しており、個人の背後にある国家という不気味な権力が顔をのぞかせている。『猶予された者たち』の社会は、現代社会の権力構造である「管理社会」を体現しているように見える。

４．権力打開への方途

４．１．生き残る者の感情の克服

「求愛(Die Werbung)[Dr:195/262]」という場面では、「四三」という女性が「四六」という男性に愛の告白をする。『猶予された者たち』の社会では、名前の数字が大きい者ほど「上流」とされ、ステータスが高いため、多くの女性が「上流」の男性に憧れる。それに対して「四三」は「上流」の男性を「高慢で愚かしい(aufgeblasen und dumm) [Dr:197/264]」と考えている。そのような人たちは自分の周りの誰よりも生きのびるので、自分をこの世で唯一の者であるかのように感じ、他人に心を寄せることも、誰かに同情することもできない。したがって、誰かを愛することもできない。彼らは冷酷な人間だと、「四三」は主張する[Vgl.Dr: 197-198/265]。そして、「少々平凡な名前(etwas mittelmäßigen Namen) [Dr:197/264]」を持つ「中流」の「四六」に好意を抱く。「四三」は男性にステータスを求めるのではなく、「生き残ること」を相互に防ぐことを求めているからだ。「四三」は以下のように述べている。

> 女：[...]私は愛する人の死の後に、生きながらえたくはない。けれど彼に私の死の後を生きながらえてほしくもない。
> Frau: [...]Den Mann, den ich liebe, will ich nicht überleben. Aber ich will auch nicht, daß er mich überlebt. [Dr:198/265]

「四三」と四六は同世代であり、名前の数字も近い。したがって二人の死期も近いということになる。全く同時に死ぬことは無理でも、近い時期に死ぬこととなる。ともに死ぬことによって、相手を失くした悲しみをお互いが味わうことのないようにしたという、感情が現れている。愛する者よりも自分の方が生きのびているという悲しみを抱くことがないように、「共通の瞬間」を求めているのである。しかし一方で、しかしこの「四三」、生き残るという優越感の感情を克服しようという試みでもある。生き残るという感情を失くすことによ

7 イシャグプール：134
8 須藤温子「カネッティの死生学―生きる罪と死への抗い」（日本独文学会研究叢書 059 号『『群衆と権力』の射程―エリアス・カネッティ再読』2009 年、19～33 頁）21 頁

って、権力を志向する衝動が抑制されるからである。

スイスのチューリッヒ中央図書館に保管されている『猶予された者たち』の草稿は、五つある。1951 年 3 月 21 日から同年 10 月 8 日に書かれた最初の草稿を見ると、「求愛」の場面はこの稿の一番初めに書かれていた。この場面を物語の冒頭にする予定だったのか、最初に思いついたためにこの場面を一番初めにしたのかは不明であるが、いずれにせよ、構想段階から既にこの場面がカネッティの念頭にあったことが分かる。この場面はカネッティにとって、重要な意味を持っていたと推察される。カネッティは「生き残る者の感情の克服」を『猶予された者たち』における重要なテーマのひとつと考えていたからではないだろうか。

「権力感情を克服する」という、カネッティのテーマの一端が、「四三」の行動に垣間見える。しかし、「四三」の行動は「瞬間」の秩序内での抵抗に終止している。個人的には権力を克服できるが、社会全体における権力の克服は不可能となっている。それゆえ、『猶予された者たち』の人々には、社会全体における権力を克服する革命が必要となるのである。

４．２．革命

主人公「五〇」は、人々が定められた時に死ぬとされていたことが、虚偽であったと知り、それを人々に知らせる。「五〇」のこの行動が革命と呼ばれるが、しかし、「五〇」は革命後、「何も始めるんじゃなかった。(Ich hätte nichts beginnen dürfen.)[248/327]」と述べ、革命を起こしたことを後悔している。なぜ、「五〇」は革命を後悔するのだろうか。革命に意味はなかったのだろうか。

「五〇」は、人は本当に定められた時通りに死ぬのか、ということを知りたくて革命を起こす。彼は社会を変革することを理想に掲げ、革命を起こしたわけではない。革命によって社会にどんな影響がもたらされるのか、考えた上での行動ではない。ハンス・フェスは結果を見据えずに革命を起こした「五〇」の行動を「無責任(verantwortunglos)」だとし、批判している[9]。また、マイドゥルも「五〇」の計画性のなさを指摘している[10]。「五〇」は革命の先に見据えずに行動を起こしたが、自分が起こした革命が『猶予された者たち』の社会の人々を救うことができなかったと思い知るのである。

「五〇」は否定的に評価されることが多い。しかし、「五〇」がヒーローではないということ、彼がカリスマ性を持たないということは、かえって革命を成功させていると考えられる。

> 権力を望むことなく権力を攻撃した人間のことを、私は未だかつて、ただの一度も聞いたことがない。[. . .]
> Ich habe noch nie von einem Menschen gehört, der die Macht attackiert hat, ohne sie für sich zu wollen, [...] [PM:30]

カネッティは 1942 年、以上のような断想を残している。カネッティによると、権力を打倒する者は、権力を獲得しようとする者である。革命を起こし、権力を打倒しようとした「五〇」は、彼自身も気づかぬうちに、権力を得ようと考えていたのかもしれない。とすれば、「五〇」は新しい権力者になりうる存在だったが、カリスマ性をもたないことにより、指導者の立場に着くことがなかったのではないか。「五〇」の非英雄的な性格が、指導者がいない社会、すなわち全ての者が平等な社会を可能にしたのである。

「五〇」の革命により、上流。中流、下流という、社会のヒエラルヒーは廃止された。それに加えて、革命後の登場人物が、豊かな感情を吐露できるようになったことに着目したい。革命前の『猶予された者たち』の人々は他人に感情移入や共感

---

[9] Feth, Hans: Elias Canettis Dramen. Frankfurt (Rita G. Fischer Verlag) 1980. S.255

[10] Meidl, Eva M.: Soziale Kritik im Werk Elias Canettis (1929-1952). Studien zum Begriff des „Verwandlungsverbotes“. Frankfurt am Main (Peter Lang) 1994. S.180

できない状態に陥り、感情も抑圧されていた。特に、悲しみの抑圧は顕著であった。作中に登場する幼い子供を亡くした母親は、深い悲しみを抱くことができなかった。子どもが幼くして死ぬことが始めから分かっていたからである。「五〇」の「友人」は革命前から妹「一二」を失くしたことを悲しんでいたが、革命の後ほどは深い悲しみを表すことはなかった。幼い子供を失くした母親も、妹「一二」を失くした「友人」も、死を運命と考えることによって、慰めを得ていたからである。革命後、「友人」は、妹を探そうと気も狂わんばかりに感情をあらわにする。革命前には、妹の死を運命としてあきらめ、自分を納得させていたが、定められた時が存在しないことが明らかになった今、友人は深い悲しみに打ちひしがれるのである。革命後の「友人」が示す深い悲しみには、革命前には見られなかった人間的な感情があふれている。

エヴァ・マイドゥルは、五〇の革命後、人々が感情を取り戻したこと考え、以下のように述べている。

> 平安と満足は五〇の革命後、確かに過ぎ去ったが、それによって、登場人物たちの麻痺と無関心も消え去った。
> Mit der Ruhe und Zufriedenheit ist es nach Fünfzigs Revolute twar vorbei, aber damit ist auch die Lähmung und Indifferenz der Figuren verschwunden. [11]

革命前、『猶予された者たち』の社会では、人々は感情を吐露することができなくなっていた。ところが革命によって人々に定められた死期が存在しないと暴かれたことで、人々は感情を吐露できるようになったのである。マイドゥルは、「妹・一二を探そうとすることは、人間性の始まりである。(Seine Schwester Zwölf zu suchen, ist ein Aufbruch zur Menschlichkeit.)[12]」と述べている。このように、『猶予された者たち』の人々は、感情露わにすることによって、人間性を取り戻したのである。

これまで述べてきたように、人々は、感情を露わにできるようになった。また、階級制度による他者との間の心的距離がなくなった。人々は連帯する力を手に入れたのである。マイドゥルはこの連帯という変化に注目し、「連帯できない人間たちは、互いに連帯できる者たちよりも簡単に支配下に置かれる(Menschen, die sich nicht zusammenschließen können, sind leichter unter Kontrolle zu halten, als solche, die Solidarität zueinander empfinden)[13]」と述べ、『猶予された者たち』のテーマはまさに、人々が連帯することであるとしている。革命前、『猶予された者たち』の社会では、人々は互いに心を通わせることがなかった。しかし、五〇の革命によって、人々は連帯する力を手に入れたのである。『猶予された者たち』の社会がこの先どのように変化していくのか描かれてはいないが、人々が連帯できたということは未来を明るくしているように思える。

引用文献

本論考によるカネッティの著作の引用・参照は、引用・参照の直後、[ ]内にまず書名を略号にて示し、コロンの後に原文の頁数、邦訳があるテキストに関してはスラッシュの後に邦訳の頁数を示した。略号は以下のとおりである。

AS:--(1985): *Das Augenspiel. Lebensgeschichte 1931-1937.* In: *Elias Canetti. Werke.* Taschenbuchkassette in 14 Bänden. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag)1995. Band 1.（邦訳『目の戯れ――伝記 1931-1937』岩田行一訳、法政大学出版局、1999 年）

Dr: Canetti, Elias (1964): Dramen, München, Carl Hanser Verlag.（邦訳『猶予された者たち』池内紀・小島康男訳、法政大学出版局、1975 年初版、1982 年 3 刷）

[11] Meidl:181
[12] Meidl:182
[13] Meidl:169

MM:-- (1960):Masse und Macht. In: a.a.O. Band 9.（邦訳『群衆と権力（上)』(岩田行一訳、法政大学出版局、1971 年初版、1987 年第 7 刷。『群衆と権力（下)』岩田行一訳、法政大学出版局、1971 年初版、1985 年 6 刷）

FO:-- (1980): *Die Fackel im Ohr. Lebensgeschichte 1921-1931.* In: a.a.O. Band 4.（邦訳『耳の中の炬火――伝記 1921-1931』岩田行一訳、法政大学出版局、1985 年）

GW: --(1976): Das Gewissen der Worte. München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1976.

GZK: --(1972): Die gespaltene Zukunft. Aufsätze und Gespräche, München (Carl Hanser Verlag)1972.（邦訳『断ち切られた未来―評論と対話―』岩田行一訳、法政大学出版局、1974 年初版、1981 年 2 刷）

PM: -(1972): *Aufzeichnungen 1942 - 1985. Die Provinz des Menschen. Das Geheimherz der Uhr*, München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1972, 1987, 1993.

（受理　平成 25 年 3 月 19 日）